

# 「ハイ・ブラウ」—自省的中ミドル・クラス

— 1930年代英国の知識人群像から —

尾 上 正 人\*

'High-brow' – the introspective middle-class:  
Collecting data from works of intellectuals in the 1930s Britain

Masato ONOUE

## 要 旨

英国では、「知識人 (intellectuals)」と呼ばれる階層の出現が大陸諸国よりも遅れ、長きにわたって他の「ミドル・クラス」概念の中に埋没していた。ようやく1930年代になって、「ハイ・ブラウ (High-brow)」と呼ばれる一群の知識人勢力が登場したのである。彼らに独特の主意主義的世界認識、また社会成員を「ハイ・ブラウ」「ロウ・ブラウ」に区分する手法、「大状況」と「小状況」の双方に生きるという自己認識などは、旧来の大衆指導型ミドル・クラスには見られないもので、階級社会的認識枠組に代わるものを予感させると同時に、典型的に「知識人」概念を代表していた。だが、「ハイ・ブラウ」は、「ロウ・ブラウ」=民衆・大衆との世界観の断絶を過度に強調するがゆえに、当時の社会運動において有効な役割を果たすことができなかった。とは言え、そもそも「知識人」とは、このように世俗と交わらない非政治的な存在であり、意外にも彼らの社会へのインパクトは本来小さいものである。

## はじめに

急進的社会運動一般（あるいは、より特殊には社会主義運動）において知識人の果たしてきた役割には、無視し得ないものがある——あるいは少なくとも、無視し得ないものであるかのように「知識人」は語られてきた。さらに言えば、そのように“反体制的”な身振りをするという属性規定が、「知識人」という概念の奥緊の構成要素をなしてきたようにも思われる。本稿は、そのような「知識人」概念の特性を整理してゆくことを目的とする。第1に、「知識人」とは文字通りに特定の種類・量の知識を持つ者として定義されてきたのではなく、自らの生きる環境・世界に対するある種の主意主義的な身振りがその人を「知識人」と呼ばしめてきたということを示す。第2に、そのことは、他の社会成員を「大衆 (mass)」ないし「民衆 (people)」へと分類する認識法と表裏一体をなしてきた。またそのこととも関わって第3に、自らを「少数者」ないし「少数派」として常に世間 (多数者・多数派) に提示するような、そして自己の対立概念である「大衆」「民衆」を「小状況」にのみ生きる存在として定式化するような、知識人の身振り・

話法を取り上げる。

以上のことを論ずるための素材（論証事例）として、本稿は主として1930年代の英国において「知識人」と呼ばれた人々の動向（言辞、場合によっては行動）を参照する。その理由は、この1930年代という時代が60年代と同様——したがって「失われた世代（Lost Generation）」ないし「ブルームズベリー世代」の20年代や、「知識人の終焉」（リオタール）が喧伝される昨今とは対照的に<sup>1)</sup>——、いわゆる左翼知識人・反体制知識人の季節であり<sup>2)</sup>、「知識人」の概念特性を拾う上での史料が極めて豊富であるからである。30年代英国の知識人は、その代表的存在である左翼系詩人のW・H・オーデンの名を取って「オーデン世代（Auden Generation）」と呼ばれることが多い<sup>3)</sup>。当人もその世代に属する——彼の名声はむしろ40～50年代に獲得されるとは言え——ジョージ・オーウェルが奇しくも述べたように、「きわめて突発的に1930年から35年にかけて何かが起こって「文学的気候が変わり、前代とは対照的な気質・思想傾向を持つ文化人が群をなして登場する——「突然われわれは神々のたそがれから、ひざ小僧を丸出しにしてみなで歌をうたうというボーイ・スカウト的な状況に連れ出される。……1920年代の作家たちの基調が『人生の悲劇的感覚』だったとすれば、この新しい作家たちの基調は『真剣な目的』である」（Orwell 1940=1995：49）。まことに1930年代は、知識人という社会的存在そのものに批判的なポール・ジョンソンすらも認めるように、「直接参加型グループの最盛期だった」のである（Johnson 1988=1990：441）<sup>4)</sup>。

## I 「ハイ・ブラウ」——誰が「知識人」と呼ばれてきたか

「知識人（intellectuals）」についての定義は、汗牛充棟のごとくに存在してきた<sup>5)</sup>。近著においてダニエル・ベルは、「知識人とは何か、どのような人々を知識人と呼ぶかについて、いまや大きな混乱が生じている……。そのため現在では、知識人の定義の問題に多くの時間が費やされている。……自らを知識人と呼ぶ人々の数も増加の一途をたどっている」（Bell 1994=1995：248）と、やや突き放した言い方をしている。しかしながら他方で、社会的に共有されている「知識人」概念の核のようなものがあることも、また事実であろう。

単純に字義どおりに解釈してはならないのであって、知識をより多く（あるいはより深く）持つ者が知識人となる、あるいは「知識人」と呼ばれるようになるのではない。専門知識を有する者がしばしば「テクノクラート」「エキスパート」などと称されるが「知識人」とは言われないように<sup>6)</sup>、何か特別な知識を持つことは知識人成立の十分条件ではない。エドワード・サイードの言を借りれば、「知識人は顔のない専門家に還元できない、つまり特定の職務をこなす有資格者階層に還元することはできない」のである（Said 1994=1998：37）。また、ジェフリー・ゴールドファームも、「知識人であることは、技術者（technician）や専門家（expert）以外の何ものであることであり、あるいはさらに言えば、科学者、学者や芸術家以外の何ものであることなのだ」（Goldfarb 1998：30）と述べている。だが、その「何ものが」について社会的に共有されている定義（つまり「知識人」）を明るみに出すことこそが、本稿の狙いなのである。

知識の内容が問題なのであろうか。自分の従事する職業にかかわる専門知識（expertise）だけ

では知識人の資格を得られず、より広い世界観に関係するような一般知識を有していることが求められるのであろうか。しかしながら、アントニオ・グラムシの有名な「有機的知識人」論が示すように、職業的専門知識に特化した知識の所有者も「知識人」と呼ばれ得ることがある。逆に、我々が「知識人」と呼ぶ者が全て、明確な世界観に裏打ちされた知識を有しているとは、到底言えない。例えば、詩人・文学者や画家が「知識人」と呼ばれることがままあるが、彼らの世界認識に常に論理的斉一性や理性性を求めるのは酷である場合も少なくないであろう。つまるところ、「知識人」概念に迫るに「知識」概念から攻めてゆくのは適切ではないのである。そもそも当然ながら誰も知識は有しているものであるし、その保有する知識の質から「知識人」を定義することも困難である。

では、「知識人」概念の核となるものは、一体何であるのか。ここで手掛かりと言うか非常に参考になるのが、1930年代から40年代初頭にかけて半ば流行語として盛んに用いられた「ハイ・ブラウ (high-brow)」と「ロウ・ブラウ (low-brow)」という人物形容の対語である。文字通りには「額 (brow)」の広さを指すが、前者が「インテリ」「高踏知識人」、後者が「ミーハー」「低俗人」の俗称として慣用句化していた。ハイ・ブラウは第一義的には、民衆・平民の側から見た戯画的知識人像であり、オーウェルも41年に「円い頭と鶴のような首をした」イメージを描いている (Orwell 1941=1995: 43)。しかし、当時の知識人の中には、自らハイ・ブラウをもって任ずる者も多くいた。世代名に冠せられるほどに1930年代知識人の代表格であった詩人W・H・オーデンもその一人であり<sup>7)</sup>、彼は「ハイ・ブラウとは何か? (What Is a Highbrow?)」と題する小論 (1933年) の中で、次のように定義している。

ハイ・ブラウとは何か。自分の経験に対して受動的ではなく、経験を組織化し、説明し、変えようとする人 [のことである]。実際に、自分の生きる歴史に影響を与えようとする人 [のことである]。すなわち、苦境にあって (in the water) 人生のために闘う男 [ママ] はやがて、ハイ・ブラウとなるのだ。決定的要因は、その人と環境の間の葛藤 (conflict) である。つまり、普通ハイ・ブラウと呼ばれている人々の大部分は、不幸な幼児期・青年期を送るか、あるいは身体的欠陥に苦しんできた。

(Mendelson (ed.) 1977: 317)

「不幸な幼児期・青年期」や「身体的欠陥」を有するかどうかは措くとしても、「ハイ・ブラウ」はこの時代、良家の出身者が何不自由なく育ってそのまま知識人になるようなニュアンスではなく、ある種の「環境」との絶えざる「葛藤」を経験してきている人物を指したのである<sup>8)</sup>。

また、同時代の文芸評論家にしてケンブリッジ大学教授のF・R・リーヴィスは、「ハイ・ブラウ」に関連してこう述べている。

私はかつてドーヴァー・ウィルソン氏が、「シェークスピアはハイ・ブラウではなかった」と言うのを聞いたことがある。そのとおり。確かに、シェークスピアの時代には「ハイ・ブラウ」はいなかった。ポピュラーな劇であると同時に、教育ある少数派にだけ評価され得るような詩でもある戯曲を、シェークスピアが書くことは可能だった。『ハムレット』は、[教育程度の] 最高位から下へと多くのレヴェルの反応に訴えた。同じことは、『失楽園』『クラリッサ』『トム・ジョーンズ』『ドン・ジュアン』『故郷へ帰る』にも言える。しかし、ジョージ・A・パーミンガム氏が指摘するように、『荒地』『ヒュー・セルウィン・モーベリー』『ユリシーズ』『燈台へ』には当てはまらない。これらの作品は、非常に小さな

専門化した公衆によって読まれるだけで、自分は教育があると思っている大多数の人々の手に余るのである。最も繊細な創造的才能がこの種の作品に使われる傾向を持つ時代こそ、「ハイ・ブラウ」という言葉が流行する時代である。(Leavis 1930: 25)

このようにリーヴィスは、シェークスピアに代表されるようないわゆる国民的文学が退潮してマイナー文学愛好家が登場する、あるいはこう言ってよければ純文学と大衆文学とに分裂するような文化現象のうちに、「ハイ・ブラウ」と「ロウ・ブラウ」という対立構図の出現の典型的様態を見ている。つまり、「ハイ・ブラウ」と「ロウ・ブラウ」とは、国民諸階層の中に互いに通約不可能な文化・世界認識の形式が登場していることを意味する。当然であるが、「ハイ・ブラウ」は単独で存在し得るものではなくて「ロウ・ブラウ」の存在を前提している。

30年代当時の英国では「知識人」と「ハイ・ブラウ」がほぼ同義で使われていたわけだが、これが「知識人」概念については非常に示唆的であるように思われるのである。上記のオーデンの定式化からは、「知識人」＝「ハイ・ブラウ」は特定の種類の知識を有する人々を指すのではなく、世界との関わり方の特殊な人間であることが窺われる。すなわち、「自分の経験に対して受動的ではなく、経験を組織化し、説明し、変えようとする」ような意志を持っていることこそが、「ハイ・ブラウ」たる要件であるとされている<sup>9)</sup>。これは、行為理論の文脈では主意主義 (voluntarism) と見ることができる<sup>10)</sup>。また、リーヴィスの文言には、「知識人」＝「ハイ・ブラウ」が「ハイブラウ」でない人々＝「ロウ・ブラウ」との相互参照関係のうちに成立するものであることが記されている。上の主意主義などを含めて、「ハイ・ブラウ」の特質を有していない、あるいは完全に欠落していても量的に足りない人々、つまり「ロウ・ブラウ」＝「大衆」ないし「民衆」との比較対照としてのみ、「ハイ・ブラウ」は語られるのである。

しかしながら、国民諸階層を「知識人」と「大衆」に二分するような思考は少しも新しいものではないのではないのか、何も「ハイ・ブラウ」「ロウ・ブラウ」による区分に始まったことではないのではないのか、と思われるかもしれない。けれども、こと英国に関しては実は、こういう枠組が本当に新しいもので、1920年代以前にはほとんど存在しなかったのである。つまり、英国においては歴代、フランスのように、「知識人」と呼ばれるような階層が社会・政治・経済に独自集団としての影響力を行使することはなかった——少なくとも、そのような語法は見られなかった<sup>11)</sup>。20～30年代にかけてむしろ例外的な状況が生じて、「ハイ・ブラウ」「ロウ・ブラウ」という形でそういう語法が現われたのであるが、それは主としてロシア革命とマルクス主義の思想的波及効果であったとされる (Granjon 1998: 29-30) ——だがそれも長くは続かなかった。一般に近代社会においては、いわゆる世俗的知識人 (つまり、宗教システムの外部にいる知識人) が政治ないし文化機構の中で独自の安定した地位を確立するものとされているが<sup>12)</sup>、そうした事態は英国では進行がかなり遅れたことは確かなのである。

なぜそういうことになったのか。コーフィールドは、中世から続く英国の多元主義的 (pluralistic) 社会特性により、多彩な専門職層を作り上げても統一的な知識階層が生み出されなかったこと、またこの国の経験主義的・反知識主義的風土 (anti-intellectualism) を挙げている——「彼ら [専門職層] のメリトクラシーは、純粋な知性の【メリット】にではなく、応用知識と個人的熟練に基づいていた。……それゆえ文化的には、英国の専門職は全くもって確固たる (self-

declared) 知識人ではなかった」(Corfield 1995: 247)。もう一つ考えられる理由としては、英国では——米国も多かれ少なかれそうだろうが——フランス以上に「階級 (class)」概念によって社会成員を区分する用法が優位し、それ以外の分類方法の普及を妨げたということがあるかもしれない。その結果、ドレフュス事件以来のフランス知識人が代々「知識人」の「モデル」のような地位を獲得したのに対して (Charle 1998: 44)、英国では「知識人」概念は要するに「ミドル・クラス」概念の中に埋没してしまっていたわけである。したがって1930年代に突如として英国知識人は「ミドル・クラス」の枠から抜け出て「ハイ・ブラウ」として自己主張、あるいはその他者＝「ロウ・ブラウ」からそう認識されるようになったのである——本稿の表題が「自省的中ミドル・クラス」となっているのも、概ねそうした理由による。

## II 「ハイ・ブラウ」の世界認識

LSEの若き文芸評論家ジョン・コーンフォードは<sup>13)</sup>、統一戦線 (United Front) の気運が高まりつつあった1933年に、「現代芸術の階級戦線 (The Class Front of Modern Art)」と題する小論で次のように述べた——「ブルジョア芸術衰退の特質は、芸術と生活の矛盾という概念が再び生じていることである」。これはイェーツやT・S・エリオットを指して言われたものであるが、さらに続けてこの矛盾の概念からは「芸術家の生活の社会生活との矛盾」が出てくるものとされている (Galassi 1976: 47)。これらの矛盾は、「社会のちっぽけな (petty) 争い事を見下ろして立つ、高遠 (lofty) で偏らない (impartial) 観察者としての芸術家という観念」(Galassi 1976: 48) と相即的であるという。結局のところ芸術と生活の矛盾は、「文学における革命運動」を遂行して「芸術家の『不偏不党性 (impartiality)』という理論」(Galassi 1976: 49) を拒絶することによってのみ廃棄されると、コーンフォードは説いた。また、オーデンと親交のあった (つまりオーデン・グループの) 詩人スティーヴン・スペンダーも、「我々はもはや、生活が個人化された (personified) 理念によって形作られるのを許容できない」と述べている (Spender 1935: 145)。そして「今日では、若き作家たちの間に非常にリアルな不信がある。それは彼ら自身の経験の妥当性だけでなく、彼らが生まれ育った比較的狭い環境から派生したであろう経験の妥当性についての不信でもある」(Spender 1938: 13)。

これらは一見すると、芸術家は自らの世間から隔絶された生活を脱却して人民に奉仕する芸術を想像せよといった、プロレタリア芸術運動のありふれた宣誓書にすぎないようにも読める——おそらく誰もがそう読んできたであろう。だが、このエッセイにはそれとは別に、おそらく当人たちも十分には意識していなかったであろう当時の「ハイ・ブラウ」の精神構造が典型的に読み取れるようにも思われるのである。おそらくコーンフォードのような芸術家は、たとえ「文学における革命運動」を成し遂げても上記の矛盾を克服することはできないだろう。彼が「ハイ・ブラウ」の一人であるかぎり、いくら「ロウ・ブラウ」のための芸術を産出したところで、その生活や世界観が「ロウ・ブラウ」と同化することはない (できない) のではないか。むしろ、可能かどうかはともかく今の自己の職業・生活を離脱して理想に身を投じようという、その姿勢そのものがいかにも「ハイ・ブラウ」らしく、また「ロウ・ブラウ」にはないものなのではなかろう

か。

では、ここで問題にしている「ハイ・ブラウ」の精神構造ないし世界観とは何か。コーンフォード当人の意図は措くとして、「芸術と生活の矛盾」あるいは「芸術家の生活の社会生活との矛盾」というフレーズが表現している思想は<sup>14)</sup>、ひとことで言って、先にも触れた能動性・意志を強調する主意主義的世界観である。それは同じコーンフォードの次のような一節にも表れている——「社会の階級闘争は、社会のダイナミックで生き生きした (vital) 力の、惰性力に対する闘争である」(Galassi 1976: 113)。これも「階級闘争」に言及しながら実は、彼自身に潜在する世界認識を表明していると言えるのである。同じ認識は、共産党系の「ハイ・ブラウ」たちだけでなく、30年代初頭のカトリックの社会運動家クリストファー・ドーソンが書いたエッセイにもよく表されている——ここでは、コーンフォードらにおける「芸術」が「宗教」に置き換わってはいるが。

現代世界の無秩序は、精神的現実性を否定していることに帰せられるか、もしくは、精神的秩序と日常生活のビジネスが互いに関係を持たない2つの独立世界であるかのように扱おうとすることに帰せられる。けれどもカトリシズムは、自然秩序と超自然秩序の区分・自律性を認めつつも、決してそれらの隔離を忍従することはできない。精神的なもの・永遠のものは、感覚的で一時的な物事の世界に入っていくのである。……今日では、宗教が現実と接触することが求められている。

(Maritain 1931: viii, x)

宗教家がいわゆる“カエサルのはカエサルに”の立場を捨てて「現実と接触する」ことを唱えることのうちには、「知識人」に特有な精神構造がわかりやすく出ていると見ることもできる。実際、ドーソンは次のように主意主義的と言えるであろう見地を表明している——「文明は進化の自然的プロセスの結果ではなく、人間精神による自然の支配 (mastering) に本質的に帰せられるものである。文明は人工的秩序であり、人間の知性と意志によって治められる」(Maritain 1931: xxi)。これらは、サイードの「知識人」論にある「慣習的なものより一時的であやういものに反応すること」という箇所とも通底するところがあるであろう——「知識人が反応するのは、因習的なもののロジックではなくて、果敢に試みることに、変化を代表すること、動きをつけること、けっして立ち止まらないことなのである」(Saïd 1994=1998: 110)。

芸術であれ宗教であれ、現実社会との接点を求めるという言い回しはしかし、芸術家や宗教家の立場を放棄することではない。むしろ、「高遠」な立場を堅持しているからこそ社会批判が可能になるという論理の誇示が、「ハイ・ブラウ」の精神構造には他方で見られるのである。例えばスペンダーが「芸術は人間の価値を強調するので、一つの社会批判である」(Spender 1935: 147) と言い得たのも、社会を相対化して捉える「価値」の視座があったればこそではなかろうか。こうした「芸術」と「社会」、あるいは「超自然秩序」と「自然秩序」との間の微妙な関係は主意主義的な認識枠組に特徴的なものである。本稿が問題にしているのは、現実にも「ハイ・ブラウ」が社会から隔離した存在になっていたかどうかということではない——原理的に考えてそんなことはあるはずもない。そうではなくて、「ハイ・ブラウ」という、1930年代におそらくは英国で初めて本格的に出現した知識人群の世界認識のうちに、そのような社会との隔離という自己認識が特徴的に見られたということなのである。あえて言えば、社会から隔離していると認

識された「ハイ・ブラウ」と社会構成員そのものである「ロウ・ブラウ」とが、相携えて社会を構成していたのが30年代という季節だったのであろう。

### Ⅲ 「ハイ・ブラウ」から見た「ロウ・ブラウ」

本稿では「ハイ・ブラウ」を、1930年代英国において歴史上ほとんど初めて群として出現した「知識人」として叙述してきた。彼らの「ハイ・ブラウ」としての自己認識は語義からしても当然ながら、「ロウ・ブラウ」という他者認識と表裏一体をなしている。そして、前にも述べたとおり、「ハイ・ブラウ」と「ロウ・ブラウ」によって構成される社会という認識は、それ以前のいわゆる「階級社会」的認識とは違った——もちろん、「階級社会」認識が急速に後退してしまったわけではないが——新しい社会像が出現しつつあることをも意味していたのである。それは言うなれば、知識人ないしはプロフェッションを頂点に戴く能力主義型の階層社会、あるいはエリートに対峙する「大衆社会」のイメージのようなものであるが——それらの社会像はやがて第二次大戦後に前面に押し出されてゆくことになる——、ここではそれについての論及を急ぐことはしない。

まず、自らは「ロウ・ブラウ」との関係で「少数派」であるというのが、「ハイ・ブラウ」の対他認識の出発点をなしている。「少数派」であるがゆえに社会に発言力がない、あるいは権力に接近できない——こうしたフラストレーションは歴史的に見て、台頭するミドル・クラスに共通するものでもあるだろう。F・R・リーヴィスも、先に引いた文章に続いて、「少数派は、世界を統治する権力から未だかつてないほど切り離されている」(Leavis 1930: 25)としている。「少数派」である「ハイ・ブラウ」がもっと日の当たる場所に出るべきであり、そのためにはある種のエリートによる革命が必要となる。オーデンは、「ある種の革命が不可避であり、それが少数派によって上から課されることも同様に不可避であろう」と述べている。権力の掌握にまでは至らずとも、「少数派」の正しさが証明される必ず日が来るという確信は、共産党との統一戦線を提唱して39年に労働党を追われたスタフォード・クリップス(戦後復党)の、37年党大会における次のような発言にも窺われる——「今日の少数意見は、明日の多数意見になるかもしれない、いや、なるだろうと私は信ずる」(Labour Party 1937: 157)。

文化領域における「ハイ・ブラウ」も、同じような思いに囚われている。左派の独立系調査機関である「大量観察(Mass Observation)」は、30年代の知的状況を反映して、「ハイ・ブラウ」が「ロウ・ブラウ」の生活実態を把握しようとした意図の現われと見ることができる。その39年の宣言文の中には、「知的少数者(Intellectual Few)の現在の地位は、人口の大部分(mass)が読み書きのできない農奴(serf)から成っていた時代の遺産である」と書かれているが、他方で、識字率が向上した当時であっても「なお以前と変わらぬほどたくさんの方の知的農奴がいる」という認識があり、「社会改革を起こすとすれば、それは大衆に上から課さなければならない」と主張されている(Harrison and Madge 1986: 12)。また、自らを「少数派」とする認識は、現存秩序が「多数派」のものであることの認識と不可分である。それは政治権力上の「多数派支配」ということではなく——当時の「ハイ・ブラウ」の多くが他方で共有していた「階級社会」論からし

てそれはあり得ない——、当面は文化方面を中心にした見方であり、後に「大衆社会」論に引き継がれてゆくものでもある。例えばQ・D・リーヴィスは32年の先の評論で、文学の大衆化や詩の衰退に言及して「20世紀のベストセラーは群れ (herd) の偏見を支持することに腐心している」とした上で、「少数派価値の転覆 (overthrow)」あるいは「『普通の人 (regular man)』の賛美 (glorification)」を指弾した (Leavis 1932 : 200)。

さてそれでは、「ハイ・ブラウ」から見て「ロウ・ブラウ」は、どのような精神構造・世界観を持つ存在として定式化されてきたであろうか。これについてはオーウェルが1940年に表明した、次のような「普通人」観が参考になろう——

普通の人間もまた、受け身だ……。狭い集団 (家庭生活とか、おそらくは労働組合や地方政治などの) においては、普通人は自分自身が自らの運命の主人であるという感じを持っているが、大事件に対する時には彼は自然力に対すると同じように無力である。未来に対して何かの影響を与えようと努力するどころか、彼 [ママ] はただ寝ころんで、物事が彼に対して起こるにまかせる。……第一次大戦についての本は、出来事の全体が何であるかを理解しているふりさえしない普通の兵士か下士官の書いたものだ。……彼らが言っているのは、要するにこういうことだ。「いったいぜんたいこれは何ということなんだ。知っている奴なんているもんか。おれたちにはできることは辛抱するということだけなんだ」

(Orwell 1940=1995 : 26-7)

塩川伸明も、社会主義体制下の大衆に関連してほぼ同じようなことを述べている——「圧倒的多数の『普通の』人間は『小状況』の中で生きている。『大状況』の変化は、彼らにとってはいわば天変地異のようなものとして降りかかってくるに過ぎない。……『普通の』人間にとっては、それは交通事故で突然死んだりするのと同様の出来事であり、自らが主体的に取り組むべき対象とは意識されない」(塩川 1994 : 182)。重要なのは、この「普通の人間」=「ロウ・ブラウ」がオーウェルの言う「狭い集団」、塩川の言う「小状況」の中に生きているという、オーウェルや塩川自身の認識である。この認識はおそらく、ある程度は妥当なものであろう。しかし繰り返しになるが、ここで当面問題なのは実際にも「ロウ・ブラウ」が視野狭窄的な「小状況」の中に生きているかどうかではなく、「ハイ・ブラウ」の側が「ロウ・ブラウ」を概ねそのようなものと見ている、ということだけである。

「小状況」の中にも——それこそ卑近な例だが就職か進学か、結婚、転職など——、主体的意思決定を迫られる場面は数多く存在する。その意味で、「ロウ・ブラウ」が「小状況」の中のみ生きているからといって、完全に「自分の経験に対して受動的」(オーデン) になっているのではなく——オーデンが言いたかったのも、おそらくそういうことではないと思われる——、主意主義的行為の余地は広く残されているであろう。「ロウ・ブラウ」が真に「受動的」になるのは、「大状況」(オーウェルの言い回しでは「大事件」) においてであるというのが、「ハイ・ブラウ」の認識であろう。なぜ、そう見なされているのか。上記オーウェルの引用文にあるように、端的に言って「ロウ・ブラウ」には「大事件」に対する知識がないとされているからである<sup>15)</sup>。「ハイ・ブラウ」にはあって「ロウ・ブラウ」にはない「大状況」についての知識——だがそれは、前にも述べたように専門的である必要はないし、さらに言えば“正しい”ものである必要もない。繰り返しになるが、芸術家・宗教家といった「ハイ・ブラウ」に厳密に社会科学的知見を



求めることは酷なのであり、必要なのは「大状況」について一定の観点から合理的な説明ができること、これだけである。それができれば、「大状況」に対して「受動的」でない関わり方、つまり主意主義的な関与がなされ得る。

#### IV 「ハイ・ブラウ」でないミドル・クラスとの関係

「知識人」＝「ハイ・ブラウ」は「ミドル・クラス」の一分枝にすぎない。そして、「ハイ・ブラウ」なる用語が出現する遙か以前から——あるいは英国にしては珍しく「知識人」が群を成して登場する1930年代以前から——ミドル・クラスが「民衆」ないし「大衆」を教化して社会運動へと嚮導するという現象は見られないわけではなかったのである。そもそも「民衆 (people)」という概念自体が、より上層の階級によって教育され啓蒙されるべき、あるいは代表されるべき無知な下層民というニュアンスを初めから有していた。アイリーン・ヨーによれば、「人間の権利についての啓蒙のレトリックが生ずる遙か以前から、民衆の概念は争われていた。民衆は、イングランド革命以来、英国の政治的宗教的思考のまさしく中心的概念であった」(Yeo 1997: 46)。例えば、処刑されたチャールズ1世ですら、自身を「民衆の真正なる声」として提示して議会と争ったという。時代が下ってチャーティズムの頃になると、この「民衆」概念と並んで「大衆 (mass)」概念が広く用いられるようになったが、そのニュアンスは「民衆」よりもさらに「受動的」で「指導者を必要とする」といったものであった。そして両概念の関係として、「労働者階級はいつも『大衆』だが、ミドル・クラスの生産的要素が加わると『民衆』になった」(Yeo 1997: 49)<sup>16)</sup>。同様にして、「民衆」とミドル・クラスの関係をも第2回選挙法改正時(1867年)から第一次大戦直前までトレースしたジョン・ローレンスは、ミドル・クラス社会運動家(自由党員や、後には労働党員を含む)が「民衆のために語る (speak for the people)」、すなわち「民衆」を「代表する (represent)」という観念のうちに、複雑な「曖昧さ」を見出している(Lawrence 1998: 5, 229)。すなわち、一方で現状の「民衆」を現状のまま「代表する」としながら、他方で当の「民衆」の教育・改革を志向するという、相矛盾する方向性の間の「緊張」である(Lawrence 1998: 262-3)。

では、このような「民衆」指導型ミドル・クラスと、30年代の「ハイ・ブラウ」との違いは、どこにあるのか。一見逆説的なようだが、答えは、「ハイ・ブラウ」はそれ以前のミドル・クラスと違っては、や、「民衆」「大衆」の教化・嚮導を強烈には志向しないという点にある<sup>17)</sup>。シェークスピアに代表される国民文学が衰微してジョイスやイェーツが現われたように、あるいは、オーウェルが1941年に「多くのイギリスのインテリについて真に重要な事実——イギリスの大衆文化との乖離」(Orwell 1941=1995: 46)と嘆いたように、「大衆」＝「ロウ・ブラウ」との世界観・日常的嗜好における根本的な断絶・相互理解不可能意識こそ、「ハイ・ブラウ」の自己認識の核をなすものであった。「ロウ・ブラウ」との関係で「ハイ・ブラウ」は自らを、常に「少数派」さらには孤立した存在として意識した。こうした閉塞感も、それ以前の「ミドル・クラス」と「大衆」「民衆」(その大宗は労働者)との関係にはなかったものなのである。例えば、「社会的昇進の可能性の代替物」(Michels 1957=1990: 338)である労働運動を通じて「ミドル・クラ

ス」にのし上がったラムジー・マクドナルドは1919年に、「民主制の弱さ」に関連して「大衆 (masses)」について次のような見解を残しているが、これまで見てきた「ハイ・ブラウ」の「ロウ・ブラウ」観との対照性が興味深いところである——

〔大衆は〕つまらない物事によって激情を掻き立てられたり、容易に騙されたり、ドラマチックな演出が好きだったり、非常に軽信しやすかったり、メンタルな習慣・世界に仕方なく縛られていたり、絶対におとなしく非常に従順だが、新しい指導者には非常に懐疑的で逆らって何かを信じようとしたりする。……投票する効果というのも、それによって何ができるか考えさせるのではなく、選挙を楽しませることにすぎない。(MacDonald 1919: 221-2)

ところが、こうした煽情に脆く享乐的・操作容易な「大衆」という見方は——むしろ「群集」観と言い換えた方がよいかもしれない——、「ハイ・ブラウ」には全く欠けているのである。確かに前述のごとく、「少数派」がいつか「多数派」になるという期待は持っているが、そのために「ロウ・ブラウ」を口説いて操作しようという意志は見られない。ましてや、「ロウ・ブラウ」を「代表」しようという意思もない。そもそも、「ロウ・ブラウ」がどのような気質を持つ種族であるのか、「ハイ・ブラウ」は定式化をほとんど行なわない、というよりわからないのである——「ロウ・ブラウ」は住む世界が違う（「小状況」のみに生きる）、その程度の叙述しかない。一労働者から申し上がったマクドナルドには「大衆」の気質・世界観がよくわかるが、「ハイ・ブラウ」はそうしたものから永遠に遠ざけられている——あるいは少なくとも、遠ざけられているという意識を持っている。

要約すれば、「ハイ・ブラウ」と、そうでない前代までの改革派ミドル・クラスの間には、出身階層とかいうこと以外に志向性や認識枠組の点で、次のような相違点が見られる。すなわち、前者は、「ハイ・ブラウ」「ロウ・ブラウ」という社会成員の二分割図式に則って「少数派」としての自己主張をするにとどまり、「多数派」＝「大衆」＝「ロウ・ブラウ」を教化・指導するという身振りをしない。それに対して後者は、そうした二分割の認識枠組を持っておらず、したがって「大衆」との隔絶意識も強固ではなく、彼らの心性を多少なりとも理解しているがゆえに教化・操作ひいては煽情の対象として見ることもあるのである。

### おわりに

本稿では、主として1930年代英国の「ハイ・ブラウ」をめぐる学的というよりは社会知的議論を素材にして、「知識人」概念の整理を行ってきた。「知識人」とは、文字通り特定知識の持ち主のことを言うのではなく、特定の職業階層を指すものでもなく、むしろある種の特異な世界認識に立って生きている人々のことなのである。彼らは第1に、いわゆる主意主義的認識枠組を有している。そして第2に、「大衆」＝「ロウ・ブラウ」をいわば自身のネガとして、少なくとも「大状況」への関心も理解もない「受動的」集団として捉える。しかし第3に、「知識人」は、「大衆」を嚮導して世俗の垢にまみれることを潔しとせず、あくまでも自己の信念に殉ずるを旨としているのであり、この点が前代までの民衆指導型のミドル・クラスと異なる点である。

極論してしまえば、「ハイ・ブラウ」は30年代の英国社会において、ことさら「大衆」をかど

わかつわけでもなく、文化的貢献を除けば“人畜無害”なカテゴリーであった。そもそも「知識人」とは、そういうものなのかもしれない。ゴールドファーブが言うように、「まさしく社会は、知識人なしで済ませ、知識人を無視し、さらには知識人を抑圧しても、さして直接の観察可能な損傷効果をもたらすこともないように思われる」(Goldfarb 1998: 18)。ただし、「知識人」に自由に喋らせておく社会と抑圧する社会とでは、確かに構造上大きな違いが出てくる——当時で言えば、英米仏は概ね前者、ドイツなど大陸後進国や爾清後のソ連は後者に当たる。いずれにしても、1930年代においてすら、「ハイ・ブラウ」＝「知識人」は英国社会のマージナルな存在でしかなかったのである。

### Summary

In Britain, unlike the continental countries such as France and Germany, there had been few social groups and concepts (therefore also words) representing 'intellectuals' for centuries. It was not until the 1930s that Britain experienced the emergence of intellectuals and their concept — 'high-brow,' which elucidated not so much a transformation of the British society from a class-bounded one to a professional-oriented one, as the conceptual characteristic of intellectuals. In other words, many discourses around the 'high-brow' in those days typically disclosed the specific lines that divided 'intellectuals' from other 'middle-classes.' First, what make a person an 'intellectual' (or 'high-brow') is not the fact that he/she has particular kinds and amount of knowledge, but their attitude towards the surrounding world—the attitude conventionally called voluntarism. Second, the 'intellectuals' have been defined as having a dichotomous understanding which distinguishes themselves from the residual members of society—'low-brows' ('mass' or 'people'), who have been largely supposed to lack the aforementioned voluntarism. Third, the 'intellectual' has been conceptualized as too a self-conscious or introspective middle-class, finding oneself in a minority, living in both the 'large' and 'small' situation, but regarding the majority ('mass' or 'people') as living only in the latter. Finally, unlike other radical or reformist 'middle-classes,' the 'intellectual' has neither tried to lead/educate 'low-brows' ('mass' or 'people') into an enlightened position, nor wielded strong influences on various social movements.

### 注

- 1) リオタールによれば20世紀半ば以降、知識人の特質である「総合的統一性」「普遍性」への志向が失われてきており、恵まれない人々の境遇への上層階級の介入も「防禦的で、局部的な」ものにすぎなくなったという——これが彼言うところの「知識人の終焉 (tombeau de l'intellectuel)」の本質である (Lyotard 1984=1988: 13, 16)。
- 2) 英語圏で政治的意味に用いられる「左翼 (left)」という言葉が普及したのも、実はようやく1930年代のことであった。それ以前には、'left' および 'right' が政治傾向を指し示すことはなかった。この言葉の起源であるフランスやその他多くの欧州大陸諸国の議会では、中央の演台から向かって右に保守勢力、左に改革勢力が陣取ったため、この用法が根づいた。しかし、ウェストミンスターでは (現在もそうだが) 両陣営が向かい合って座り、政治傾向には関係なく与党が議長の右、野党が左に座ったため——例えば労働党でも与党なら“右翼”になる——、この語法には馴染まなかったのである。英国において印刷物で

- 「左翼主義 (leftism)」という言葉を使ったのは、1927年のH・G・ウェルズが最初であったと言われている (Deane (ed.) 1998 : 35-6)。
- 3) 「オーデン世代」という呼称は後世、1972年のサミュエル・ハインズの同名の書物が普及させたものである——「30年代の文学生活におけるオーデンの中心性……オーデンらは、他の左翼作家のグループ以上に、1930年代にとって『中心的』であった」(Deane (ed.) 1998 : 5)。厳密には、「オーデン世代」は思想的に2つのグループに分かたれる。一つは、英国共産党と完全に命運を共にした (つまり黨員であった) コーンフォード、コードウェル、フォックス、ドノリーなど一群の赤色知識人であり、もう一方が「オーデン・グループ」とも「桃色詩人」とも呼ばれたシンパ層である——具体的には、オーデン、デイ・ルイス、スペンダーなどがこれに含まれる。両者には「芸術の絶対的自由」が担保できるか——すなわち、革命・プロレタリアートに奉仕しない芸術があり得るか——をめぐる深刻な対立があったという。けれども、本稿では両者の立場を明確には区別せず、「オーデン世代」ということで一括りにしている。そのわけは、「ハイ・ブラウ」という自己認識から来る世界認識において、彼らは共通点を持っていたからである。富岡次郎もややニュアンスは異なるが、「両者ともブルジョア社会における実生活と社会主義芸術の矛盾を埋めることができなかった点において、両者の間に本質的な相違はなかったのではなからうか」(富岡 1980 : 365) としている。なお、オーデン自身は30年代のことを、ファシズムが跋扈する「低級で不誠実な十年」と定式化していた (Smith 1998 : 2)。
- 4) 社会史家のロス・マッキビンも、「1930年代に、モダンであると自認する……民主主義的なミドル・クラスが出現した。自らを、むしろ組織労働者以上に『進歩的』階級と見なした人々であった」(McKibbin 1998 : 49) と述べている。
- 5) 「14世紀から19世紀まで、‘intellectual’ は形容詞として用いられることの方が多く、‘intelligent’ とどいたい同じ意味であった」(Milner 1999 : 149)。ジェームズ・エプステインによれば、欧米において「特定の種類の仕事を行なう特定の種類の人たち」という意味で——つまり、職業階層的ニュアンスで——「知識人 (intellectual)」という単語が使われるようになったのは、19世紀初頭からである。ただし英国では、1890年代までこの語が広く使われるようにはならなかった (Epstein 1996 : 54)。この遅れは、本文でも述べているように、英国では「ミドル・クラス」という概念が多用されてきたことと関係があると思われる。
- 6) ベネロピ・コーフィールドの概念史研究によれば、英国において ‘expert’ なる語は18世紀には既に形容詞として知られていたが、名詞としても使われるようになったのは1820年代の半ばからであるという (Corfield 1995 : 37)。
- 7) ウイスタン・ヒュー・オーデン (1907-73) は、30年代には左派文学者の頭目的存在となった。スペイン内乱に際して共和国政府に支持を表明し、担架運搬人として短期間バルセロナとバレンシアに滞在したがすぐ帰国し、37年に代表作『スペイン』を発表した。39年に米国移住 (のち帰化)、独ソ不可侵条約に愛想を尽かしてマルクス主義からは遠のき、宗教的神秘主義に傾倒していった。
- 8) しかしながら、オーデンと親交のあった (つまりオーデン・グループの) 詩人C・デイ・ルイスは、「ハイ・ブラウ」という言葉にオーデンよりも否定的なニュアンスを込めている——「自らのブルジョアの出自を軽蔑的に振り返ることで、『ハイ・ブラウ主義 (highbrow-ism)』を非難することで、あるいは個人的懷疑の雰囲気や迫ることによって、我々はそれら [孤立した詩人たち] を遠ざけておくことができるのである」(Lewis 1935 : 400)。
- 9) F・R・リーヴィスの妻Q・D・リーヴィスも、次のように述べている——「ロウ・ブラウは、群れ (herd) から課される制限を無批判に受け入れるが、ハイ・ブラウはそうではなく、[そのために群れから]『屈しない (superior)』あるいは高慢な人と貶される」(Leavis 1932 : 187)。
- 10) 主意主義的行為理論と言えればパーソンズのそれが直ちに想起されるが、その要諦は彼自身の言葉によれ

ば、「行為体系の規範的側面と条件的側面への分割」(Parsons 1937=1989: 102)にある。しかし、彼のいわゆるホップズ問題への対処の仕方に顕著に窺われるように、主意主義とは実際には、行為の「条件的側面」(条件・手段)よりも「規範的側面」(規範・目的)を強調するものなのである。

- 11) 「1890年代に英国人が実際に『知識人 (intellectual)』という名詞を使った時には、それは、この[フランスの]特別な政治的アクティヴィズムの伝統を否定するものであった。概ね文芸的な英国のインテリゲンチヤとは、美的で社会から孤立した、概ね非政治的な保守的職業のことを想定していた」(Levy 1987: 9)。また、ジェームズ・エプSTEINは、19世紀前半までの社会運動についての論文の中で、「驚くべきことは、1790年から1848年までの危機の時代の間、民衆急進主義 (popular radicalism) と労働紛争の性質を形作る上で、ミドル・クラス知識人の意義が相対的に小さかったことである」(Epstein 1996: 54)と述べ、むしろ庶民 (plebeian) 出の独学者たち (autodidacts) の果たした役割が大きかったとしている。
- 12) 例えばポール・ジョンソンは、「現代世界の形成にあたって主な要因となったのは、世俗の知識人の出現で、これは多くの点で新しい現象だといってよい」(Johnson 1988=1990: 11)と述べている。また、ゴールドファブによれば、「知識人は[古代の昔から]長い間存在してきたが、彼らが独立の文化機構の中に比較的安定した地位を得るのは、近代性においてである」(Goldfarb 1998: 203)。
- 13) コーンフォードは1916年生まれ、つまり当時まだ17歳で、LSE入学後に青年共産主義者同盟 (Young Communist League) に加わった。「学生前衛 (The Student Vanguard)」と「若き労働者 (Young Worker)」の編集者、学生社会同盟 (Federation of Student Society) の書記長などを歴任したが、スペイン内乱に際して最初の英国人義勇兵として出征、36年にコルドバで戦死した。
- 14) こうした「矛盾」の認識は、コードウェルにも見られる——「その生活の矛盾のゆえに、詩人の反応は職人 (craftsman) のそれに似ている。彼 [ママ] は社会的機能に職能を、『生活』に『芸術』を対置させる」(Caudwell 1937: 108)。
- 15) 一般に、ある事柄について知識を持つということは、それに主体的に関与することであり——例えば「寄り付かない」「忌避する」というのも、それはそれで一つの関与の仕方である——、よりレトリカルに言えばその事柄を「生きる」、あるいは事柄の中に「住む」ことにほかならない。
- 16) 引き続きいてヨーは、20世紀になると「民衆」は一つの「抽象」となり、「自分たち自身で語ったり自分たちのために行動したりできない」「受け身の」「限りなく多数の民衆・市民」を意味するようになったとしている (Yeo 1997: 56)。
- 17) 念のために申し添えておけば、このことは、30年代になって「民衆」「大衆」について語るものが減少したということではない。むしろ本稿で冒頭から紹介している「ハイ・ブラウ」の文献には、「民衆」「労働者階級」といった言辭が溢れ返っている。その点ではブルデュー的な意味で、「民衆」は知識人間の闘争の「賭け金」であったことに変わりないであろう (Baxendale and Pawling 1996: 17)。30年代の真の特質は、「民衆」「大衆」像が「非合理的」な情動で動く扇動・操作可能な対象物というものから、何やら神聖視される抽象的定在へと変化したところにあるように思われるのである。

## 文 献

- Baxendale, John and Christopher Pawling. (1996) *Narrating Thirties-A Decade in the Making: 1930 to the Present*, Macmillan.
- Bell, Daniel. (1994=1995) 'Intellectuals at the Turning Point'. 杉浦茂樹 (訳) 「増加する知的 [下層民]」, 『季刊アステイオン』32号, 山崎正和 (解説) 「知識社会の衝撃」(評論集), TBSブリタニカ, pp.247-55.
- Caudwell, Cristpher. (1937) *Illusion and Reality: A Study of the Sources of Poetry*, Lawrence and Wishart.

- Charle, Christophe. (1998) 'L'histoire comparée des intellectuels en Europe. Quelques points de méthode et proposition de recherche,' Michel Trebitsch et Marie-Christine Granjon (eds.), *Pour une histoire comparée des intellectuels*, Édition Complexe, pp.39-59.
- Corfield, Penelope J. (1995) *Power and Professions in Britain 1700-1850*, Routledge.
- Deane, Patrick (eds.). (1998) *History in Our Hands: A Critical Anthology of Writing on Literature, Culture and Politics from the 1930s*, Leicester University Press.
- Epstein, James. (1996) "'Bread as a Mechanic": Plebeian Intellectuals and Popular Politics in Early Nineteenth-Century England,' Leon Fink, Stephen T. Leonard and Donald M. Reid (eds.), *Intellectuals and the Public Life: Between Radicalism and Reform*, Cornell University Press, pp.53-73.
- Galassi, Jonathan (ed.). (1976) *Understand the Weapon, Understand the Wound: Selected Writings of John Cornford*, Carcanet New Press.
- Goldfarb, Jeffrey C. (1998) *Civility and Subversion: The Intellectual in Democratic Society*, Cambridge University Press.
- Granjon, Marie-Christine. (1998) 'Une enquête collective sur l'histoire comparée des intellectuels: synthèse et perspectives,' Michel Trebitsch et Marie-Christine Granjon (eds.), *Pour une histoire comparée des intellectuels*, Édition Complexe, pp.19-38.
- Harrison, Tom and Charles Madge. (1986) *Britain by Mass-Observation*, Cresset.
- Johnson, Paul. (1988=1990) *Intellectuals*, George Weidenfeld & Nicolson. 別宮貞徳 (訳) 『インテレクチュアルズ』, 共同通信社.
- Labour Party. (1937) *The Labour Party Report of the 37th Annual Conference at Bournemouth*.
- Lawrence, Jon. (1998) *Speaking for the People: Party, Language and Popular Politics in England, 1867-1914*, Cambridge University Press.
- Leavis, F. R. (1930) *Mass Civilisation and Minority Culture*, Minority Press.
- Leavis, Q. D. (1932) *Fiction and the Reading Public*, Chatto and Windos.
- Levy, Carl. (1987) 'Introduction: historical and theoretical themes,' Carl Levy (ed.), *Socialism and Intelligentsia 1880-1914*, Routledge & Kegan Paul, pp.1-34.
- Lewis, C. Day. (1935) 'Revolution and Poetry,' *Left Review*, Vol.1, No.10, pp.397-402.
- Liotard, Jean-François. (1984=1988) *Tombeau de l'intellectuel et autres papiers*, Éditions Galilée. 原田佳彦・清水 正 (訳) 『知識人の終焉』, 法政大学出版局.
- Macdonald, J. Ramsay. (1919) *Parliament and Revolution*, National Labour Press.
- Maritain, Jacques. (1931) *Religion and Culture*, Sheed and Ward.
- McKibbin, Ross. (1998) *Classes and Cultures: England 1918-1951*, Oxford University Press.
- Mendelson, Edward. (1977) *The English Auden: Poems, Essays and Dramatic Writings, 1927-1939*, Faber and Faber.
- Michels, Robert. (1957=1990) *Zur Sociologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie: Untersuchungen über die Oligarchischen Tendenzen des Gruppenlebens*, Alfred Kröner Verlag. 森博・樋口晟子 (訳) 『現代民主主義における政党の社会学』, 木鐸社.
- Milner, Andrew. (1999) *Class*, SAGE.
- Orwell, George. (1940=1995) *Inside the Whale: A Book of Essays*, Victor Gollancz. 鶴見俊輔 (訳) 『鯨の腹のなかで』, 川端康雄 (編訳) 『鯨の腹のなかで——オーウェル評論集 3』, 平凡社, pp.9-87.
- Orwell, George. (1941=1995) *The Lion and the Unicorn: Socialism and the English Genius*, Secker and Warburg. 小野協一 (訳) 『ライオンと一角獣——社会主義とイギリス精神』, 川端康雄 (編訳) 『ライ

オンと一角獣——オーウェル評論集 4 ], 平凡社, pp.9-118.

Parsons, Talcott. (1937=1989) *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, McGraw Hill. 稲上 毅・厚東洋輔・溝部明男 (訳) 『社会的行為の構造 5 M・ウェーバー論 (II)』, 木鐸社.

Said, Edward W. (1994=1998) *Representation of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures*, Vitage. 大橋洋一 (訳) 『知識人とは何か』, 平凡社.

塩川伸明 (1994) 『社会主義とは何だったか』, 勁草書房.

Smith, Malcolm. (1998) *Democracy in a Depression: Britain in the 1920s and 1930s*, University of Wales Press.

Spender, Stephen. (1935) 'Writers and Manifestos,' *Left Review*, Vol.1, No.5, pp.145-50.

Spender, Stephen. (1938) 'The Left Wing Orthodoxy,' *New Verse*, Vol.31, No.2, pp.12-6.

富岡次郎 (1980) 『イギリス社会主義運動と知識人』, 三一書房.

Yeo, Eileen Janes. (1997) 'Language and contestation: the case of the "People," 1832 to the present,' John Belchem and Neville Kirk (eds.), *Language of Labour*, Ashgate, pp.44-62.

